〈書　　評〉

愛はなぜ終わるのか
"結婚・不倫・離婚の自然史"
ヘレン・E・フィッシャー（Helen E. Fisher）著
吉田利子訳　全305頁
草思社　東京　1993　1,900円

原題は"Anatomy of Love"であり，日本語訳本の帯見出しには"人間は4年で離婚する!?愛の解剖学"と印刷されており，なかなか衝撃的なタイトルである．

著者はヘレン・E・フィッシャーという双子の女性でニューヨーク自然史博物館の人類学部門研究員である．双子の生いたちから著者はヒトの資質は「素質か環境か」という点に興味をおぼえ，遺伝子的なものにおいても環境に適しているものが発展（淘汰の結果）したと考えている．このことはセックスにおいても同様であり，性的刺激が高められる適応（性器等の形態の変化，マルチオーガニズム等の機能の向上…）が行われたという点を人類の太古からの歴史を通じて述べている．

すなわち，ヒトを含めた動物の求愛行動（ボディートーク，視線，同調行動，匂いなど）は生物としての繁殖のための自然な行動であり，性行動を併なう．そして，ヒトに共通する性行動の中で一番顕著なのは「結婚しようとする」ことであり，世界のどの文化にも普遍的な現象らしい．しかし，その形式はいろいろあり，歴史的に記録がある853の文化圏のうち一夫一妻制（モノジニー）は16%であり，残り84%は男性に一時に二人以上の妻を持つことを許す一夫多妻（ポリジニー）制である．しかし，ポリジニー社会で実際に複数の妻をめとっているのは男性5～10%程しかなく，繁殖の点からは好都合であるポリジニーも多くの要因によって（経済，宗教など）制約をうけている様である．

一方，女性の立場から考え，一妻多夫制（ポリアンドリー）は0.5%と少なく，これも生物学的な理由として，ホ乳類のメスは一生の間にかぎられた数の子供しか産めず，妊娠，出産および育児に多大な時間がかかるための適応と考えられている．

では，なぜ不倫離婚がおこるかというと，男は多くに遺伝子をばらまき，女は数少ない出産を有効なものにするという繁殖戦略である．しかし，性的な禁欲と神とが結びついて（主に西欧社会を中心に），不倫，離婚が男も女も罪となってきたと述べている．昔，狩猟・採集生活の時代は基本的に男女平等の社会であり，役割分担はあったにせよ個々が尊重されていた．一方，鋤（スキ）（鍬（クワ）ではなく）を使う農耕社会になると男女の体力差から仕事の分担と同時に重要度が男性有利となり，この社会では離婚率が低かったと推定している．

しかしながら，現在では「働く女性」という言葉に代表されるように女性の自立により男女平等の機運が高まり離婚，不倫の割合が増し，古代の人間性に合致した愛と結婚の伝統に逆戻りしていると述べている．そして，国連の人口統計年鑑より，世界62の国，地域における離婚した時の結婚年数別の度数分布の最頻度値が4年に位置しているというものである．

今後の人口，家族などを考えるに示唆を与えてくれる書籍であるが，全305頁の中で図表は上記の国連人口統計年鑑より算出した1つしかなく，少しものたりない面が残念である．なお，リチャード・ドーキンス「利己的な遺伝子」（紀伊国屋書店），竹内久美子「男と女の進化論」（新潮社）などを参照されると，さらに理解が深まるであろう．

上田伸男（栄養生化学部・宇都宮大学教育学部）